

「映画のような漫画を描きたい」。『ジョジョの奇妙な冒険』の作者・荒木飛呂彦は、かつて本誌のインタビューでそう語った。一九八〇年のデビューから現在に至るまで、一貫して「映画的な漫画表現」を追求してきた荒木は、『ブレードランナー』という作品をいかに咀嚼し、自らの血肉としてきたのだろうか？『ジョジョ』創作の裏話とともに語る。

——『ブレードランナー』が日本で公開されたのは、荒木先生が漫画家デビューされてから二年後の一九八二年。当時は、どのような思いでこの作品をご覧になつたのでしょうか？

荒木 まだ『ジョジョ』を連載する前ですから、「これから、どうやって漫画を描いていこうか……」と模索している時期ですね。今でもそうですが、僕はその作品の「面白さ」を分析しながら映画を見るのが好きなんです。当時から創作の勉強を兼ねてよく映画館に行っていました。

あのころはスタローンやシュワルツェネッガーが出演する肉体派の作品や、「家族愛をわかりやすく描くような映画」が多かったので、『ブレードランナー』は異彩を放っていましたね。僕はこの作品を、「七〇年代の、ある種の完成形」だと思っていますよ。

——異質でありながら、完成形であったと。
荒木 ええ。たとえば、『ブレードランナー』では、あらゆる境界があえて曖昧に描かれていますよね。東洋と西洋の文化が同居する混沌とした街並みもそうですが、人工物であるレプリカントと人間の線引きや、正義と惡の境界も非常に曖昧です。その世界観は、多様な文化が「フュージョン」した七〇年代を象徴している

荒木飛呂彦

(漫画家)

ブレードランナーに見る、 融合と境界



「漫画のような映画」を目指したスコット

——荒木先生は、本誌の二〇一六年春号のインタビューで「映画のような漫画を描きたい」とおっしゃっていました。調べてみると、『ブレードランナー』を手がけたリドリー・スコットは、過去のインタビューでこの作品を「漫画の映画」であると説明しています。つまり、荒木先生とは真逆の視点で発言をしているんですね。

荒木 え？ そうなんですか？

——面白いことに、リドリー・スコットはフランスの漫画であるバンド・デシネに強い影響を受けているようで、『ブレードランナー』のビジュアルイメージはバンド・デシネの巨匠、メビウスが描いた『ロング・トゥモロー』という作品を参考にしたという逸話があります。

荒木 言われてみると、僕が好きなバンド・デシネ作家であるエンキ・ビラルの作品なども、『ブレードランナー』に似た「フュージョン」を感じさせます。あらゆる文化が入り混じった世界が描かれているという点では、『ブレードランナー』にもバンド・デシネに通じる魅力を見出せるかもしれませんね。

——荒木先生は漫画家として、「映画的な表現」を目指されていることですが、逆に漫画に

ようと思えるのです。

僕が特にフュージョンを感じるのは、劇中で流れるヴァンゲリスの音楽。彼が手がけた曲は、電子音楽でありながらインドや中国のモチーフが組み込まれています。あの曲を耳になると、七〇年代の匂いまで薫つてくる気がします。

——当時から創作の勉強を兼ねて映画をご覧になっていたのですが、『ブレードランナー』は決してわかりやすい作品ではありませんよね。荒木先生は、この作品の「曖昧さ」をどのように咀嚼し、分析されたのでしょうか？

荒木 つくり方で言えば、『ブレードランナー』という作品は、『ジョジョ』とは真逆に位置するものだと思っています。僕が『ジョジョ』で目指しているのは、正義と悪や、自分と他人の境界を曖昧にせず、はつきりと描き分けることで



『ジョジョの奇妙な冒険』に登場するDIOは、ロイ・バティの影響を少なからず受けているのだと。